

(別紙)

日中の高温による施設農作物等の管理について

令和7年5月12日

長野県農業技術課

1 水稻育苗ハウス

- (1) 直射日光下での種子予措（浸漬、催芽）は、水温が上がり、発芽の不斉一、細菌性病害の発生につながるので、日よけなどを設置し、浸漬では15℃以上、催芽では28℃以上にならないようにする。
- (2) 播種後のトンネル、育苗パイプハウス方式での高温管理は、細菌性病害、焼け、苗立枯病の発生につながるので、下記により適温管理を徹底する。
 - ア トンネル、育苗用パイプハウスでの平置き出芽方式を行っている場合には、出芽前からビニールを開ける等、換気に留意し、床土温度が細菌性病害等の発生につながる28℃以上にならないようにする。
 - イ 高温により第1葉鞘が徒長すると、軟弱徒長苗につながる所以、出芽後から換気に留意する。トンネル、ハウスのビニールは、日射に伴い内部温度が上昇する前から開け、田植えが近くなり、降霜の心配のない日は夜間も開放する。また、目の細かいネットをサイドに張っている場合は換気が不十分となるので、高温時は開放し、換気を促進する。
 - ウ 日中に灌水する必要がある場合は、ホース内、配管内に残った水が熱水になっている場合があるため、灌水開始時は温度確認を行う。
 - エ プール育苗において、緑化終期の湛水開始前に乾燥する場合には、プール床への浅水入水等により水管理を行う。

2 果樹

(1) 施設ブドウ

日中の施設内温度を30℃以上の高温としないよう、換気を十分に行うなど注意する。

3 野菜・花き全般

- (1) 施設栽培や育苗施設では、強日射による急激な温度上昇等を防止するため、寒冷紗や遮光（遮熱）資材を用いて、できる限り室温上昇の抑制に努める。

また、かん水の機会を増やすとともに循環扇等を利用して適切な換気を励行するとともに、ハウス側面や妻面のビニール被覆等を日中巻き上げる、施設内外及び周囲の遮へい物を整理するなど通風の改善を図る。
- (2) ハダニ類・アザミウマ類などの発生が増加しやすくなるため、発生源となるほ場内・外の除草を徹底し、初期防除の徹底を図る。

3-1 施設花き

(1) カーネーション

寒暖差が大きいと節折れや節曲がりが発生しやすくなるため、晴天日の日中は25℃以下を目標に換気を行う。高温が続くとハダニ等の害虫が発生する恐れがあるため、ほ場内での確認と適期防除に努める。

(2) トルコギキョウ

定植直後の場合は、遮光資材の被覆を行うとともに、土壌が乾燥すると初期生育が遅れるので十分な灌水を行う。

また、定植後にトンネル被覆を行っている場合は、葉焼けを防ぐため日中は開放する。ハウスの換気は適宜行うが、冷気に直接触れると生育遅延を招くので側窓換気を行う場合は特に注意する。

抽苔初期～発蕾期では葉先焼け（チップバーン）が発生しやすいため、曇天日も含めて日中の換気を行い、風通しがよくなるように管理する。

(3) アルストロメリア

日中の高温により、葉焼けや花梗の軟弱化など品質が低下するため換気を徹底する。

(4) キク

施設ギクは、日中の高温により、早期開花、短茎開花となりやすいので換気を徹底する。

4 畜産

(1) 家畜全般

急激な気温上昇による家畜の暑熱ストレスを防止するため、寒冷紗や遮光（遮熱）資材を用いた直射日光及び輻射熱の防止、涼しいうちからの換気扇及び送風機、扇風機稼働により、できる限り畜舎内温度・湿度上昇の抑制に努めるとともに適切な換気を励行する。

また夜間と日中の気温差により体調を崩す個体が出ることが考えられるので、個体・群の健康状態に十分留意する。

(2) ライムギ、牧草等

気温上昇に伴い、牧草の生育が早まることが予想されるため、出穂期に十分に留意して適期収穫を心がける。